

「わたしたちの赦しを」

詩篇 第51篇12節～19節
マタイによる福音書 第6章 12節

説教 岡村 恒牧師

「我らに罪を犯すものを我らがゆるすごとく我らの罪をもゆるしたまえ」と主の祈り>を祈るたびに口にしています。この祈りは、私たちを奇跡の中においてしまう祈りです。奇跡というのは人間業ではないという意味です。主の祈りは古代教会では特別な秘密の祈りでした。洗礼を受けた者だけが初めて教えられ、祈ることが許されました。

「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもゆるしてください。」(マタイによる福音書 第6章12節)主の祈り>を祈り始めて、この場所に来ると祈りの調子が落ちる、あるいは口を閉ざす人がいます。どうしても赦すことのできない人の顔が浮かんでくる、あるいは赦されないだろうと思う程に傷つけてしまった人のことを思い出してしまうからです。とても正直だと思います。しかし主イエスは弟子たちに向かって、本当になくてならない言葉だけをお与えになりました。

私たち人間は、神ならざる物に支配されて生きています。神の御心よりも自分の欲望が満たされるように望みます。日毎の食物を与えてくださるようになるところだけは、もしかしたら本気で祈れるかもしれません。しかし、聖書の教える日毎の糧は口から入る物だけでは無く、むしろ霊的な神の言葉の話です。

世界で起こっている事を見れば、いや自分の歩みを振り返っただけでも、赦しから遠い存在であることを思い知らされます。聖書によれば、赦しは完全に忘れ去ることです。ところが私たちが知っている赦しは、何かのきっかけで心に痛みが湧き上がってしまい、忘れさせることができない不十分な赦しです。これは罪の結果です。私たちは本当に人を愛することができないので、人を赦すこともできないのです。

今朝の祈りの箇所は、元の言葉では、「父よ私の罪を赦して下さい。」が最初に来ています。神の赦しを求め、続いて、私も私に負債のある者を赦しましたと祈るのです。私が誰か赦した分だけ神もまた私を赦してくださるといふのなら、神が与えてくださる赦しは、ちっぽけな赦しになってしまいます。そうではない、全知全能の父に完全な罪の赦しを求めて良いのだ、と主イエスはおっしゃいました。

<主の祈り>は旧約聖書に出てくる十戒と重

なっています。イスラエルの人々がエジプトで奴隷であった時、神に助けを求めました。神は祈りを聞いてモーセを遣わし、ユダヤの60万人を超える人々をエジプトから脱出をさせて下さいました。そして、私はあなたを奴隷の地、エジプトから導き出した神である、と宣言なさり、十戒をお与えになりました。

<主の祈り>も与えられた状況は同じです。ちょうどユダヤ人が、まだ約束の地には着いていないけれども、解放された後で十戒を与えられたように、主イエスが来てくださったこの世界で、弟子たちはこの祈りを受け取りました。ですから、この祈りは奇跡の祈りです。

主イエスは、私たちがこの祈りを喜んで、朝に夕に、生まれてから死ぬまで祈り続けることができるようにして下さいました。主イエスが、あの馬小屋に生まれ、十字架の上で死んで、墓に葬られ、3日目によみがえってくださったのは、そして、やがてもう1度来てくださるのは私たちがこの祈りを祈ることができるためです。<主の祈り>は私たちが繰り返し神の前に立たせる祈りなのです。

努力して全財産や命まで差し出しても、なお自分の力では獲得できない赦しを、神はただ主イエスの命を代償として与えてくださるお方です。本当に人を愛することに失敗する私たちが、神に赦されている一事を知って、赦す者に変えられます。神の奇跡は実現していきます。出来事が起こった時、後で振り返って、人々はそれが奇跡だと知るようになります。ただ神の力によって、私たちの性格や日常生活、人間関係が、何より神との関係が変えられてしまうからです。

<主の祈り>を祈る時、祈りの声が小さくなるかもしれません。どうしてもこの部分だけ祈ることができない日があるかもしれません。しかしなお、私たちは神の奇跡の中にいるのです。私たちが愛し抜いてくださる神が、私たちの神なのです。主イエスは、命を懸けて私たちの口に<主の祈り>を入れてくださいました。この奇跡の言葉を口にするとき、奇跡が実体化していきます。私たちの人生全体を、神の奇跡が包み込んでいきます。<主の祈り>を心からの感謝を持って祈り続け、神の赦しを味わい続けて歩みましょう。

(記 説教要約奉仕者)